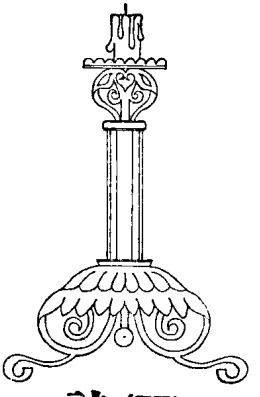
中原中也全集 2

中原中也全集

2



詩〈II〉

中原中也全集　第2巻
詩 Ⅱ

1967年11月20日　初版發行
1975年1月10日　9版發行

著者　中原中也
編者　大岡昇平
　　中村稔
　　吉田凞生
發行者　角川源義
印刷者　中内あき子
發行所　角川書店
東京都千代田區富士見
2の13 Tel (265)7111
振替 東京195208
中光印刷・鈴木製本
0392-571702-0946(1)

目

次

未刊詩篇(續)

〔一九二八年—一九二九年〕

女よ　三
幼年囚の歌　一四
寒い夜の自我像（2・3）　一八
冷酷の歌　二
雪が降ってゐる……　二七
身過ぎ　三〇
倦怠（倦怠の谷間に落つる）　三三
夏は青い空に……　三四
夏の海　三六
頌歌　三九
追懷　四一
浮浪　四三
暗い天候（二・三）　四五
嘘つきに　四九

我が祈り　五一

〔一九三〇年—一九三二年〕

夏と私　五四
郵便局　五六
幻想　五六
かなしみ　六一
北澤風景　六三
三毛猫の主の歌へる　六五
干物　六七
いちじくの葉（いちじくの、葉が夕空にくろぐろと）　六九
カフェーにて　七一
（休みなされ）　七三
砂漠の渴き　七五
（そのうすいくちびると）　八〇
（孤兒の肌に唾吐きかけて）　八二
（風のたよりに、沖のこと　聞けば）　八四

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

Qu'est-ce que c'est que moi? 八六
さまざまな人 八八
夜空と酒場 九〇
手紙 九二
夜店 九三
Tableau Triste 九五
風雨 九七
(吹く風を心の友と) 九九
(秋の夜に) 一〇一
(支那といふのは、吊鐘の中に這入つてゐる蛇のやうなもの) 一〇三
(われ等のヂェネレーションには仕事がない) 一〇五
(月はおぼろにかすむ夜に) 一〇六
(ポロリ、ポロリと死んでゆく) 一〇七
疲れやつれた美しい顔 一一〇
死別の翌日 一一三
コキューの憶ひ出 一一四
細心 一一六
マルレネ・ディートリッヒ 一一八
秋の日曜 一二〇
(ナイヤガラの上には、月が出て) 一二三
(汽笛が鳴つたので) 一二四
(七錢でバットを買つて) 一二六
(それは一時の氣の迷ひ) 一二九
(僕達の記憶力は鈍いから) 一三一
(南無 ダダ) 一三三
(頭を、ポーズにしてやらう) 一三五
(自然といふものは、つまらなくはない) 一三七
(月の光は音もなし) 一三九
(他愛もない僕の歌が) 一四一
嬰兒 一四三
(宵に寢て、秋の夜中に目が覺めて) 一四五
(秋の日の吊瓶落しや悲しさや) 一四七
お會式の夜 一四八

蒼ざめし我の心に　一五一
（辛いこつた辛いこつた！）　一五三
脱毛の秋　一五五
幻　想　一六三
修羅街挽歌　其の二　一六九

〔一九三三年―一九三四年〕

（あゝわれは　おぼれたるかな）　一七七
小　唄　一七八
（形式整美のかの夢や）　一八〇
早春散歩　一八八
（僕の夢は破れて、其處に血を流した）　一九〇
（土を見るがいい）　一九二
（卓子に、俯いてする夢想にも倦きると）　一九四
小　景　一九六
蛙　聲　一九八
（蛙等は月を見ない）　二〇〇
（蛙等が、どんなに鳴かうと）　二〇二
Qu'est-ce que c'est?　二〇四
孟夏谿行（短歌）　二〇六
（宵の銀座は花束捧げ）　二〇八
蟲の聲　二一〇
怨　恨　二一二
怠　惰　二一四
蟬　二一六
夏（なんの樂しみもないのみならず）　二一九
夏過けて、友よ、秋とはなりました　二二三
燃える血　二二五
夏の記憶　二二九
童　謠　二三一
京濱街道にて　二三三
いちじくの葉（夏の午前よ、いちじくの葉よ）　二三四
或る夜の幻想（1・3）　二三六

(小川が青く光つてゐるのは) 二三九
朝 (かゞやかしい朝よ) 二四一
朝 (雀が鳴いてゐる) 二四三
ピチベの哲學 二四五
玩具の賦 二四八
狂氣の手紙 二五四
咏嘆調 二五六
昏睡 二六〇
夜明け 二六二
朝 (雀の聲が鳴きました) 二六四
道化の臨終 二六六
秋岸清涼居士 二七四
月下の告白 二八一
別離 二八三
悲しい歌 二九一
(お天氣の日の海の沖では) 二九九
野卑時代 三〇一
(海は、お天氣の日には) 三〇三
星とピエロ 三〇五
誘蛾燈詠歌 三〇八
(なんにも書かなかつたら) 三一五
(一本の藁は畦の枯草の間に挾つて) 三二一
〔一九三五年—一九三七年〕
坊や 三二四
僕が知る 三二六
初戀集 三二八
すずえ 三三〇
むつよ 三三一
(おまへが花のやうに) 三三四
初戀集終歌 三三六
月夜とポプラ 三三八
僕と吹雪 三四〇
不氣味な悲鳴 三四三
寒い! 三四五
我がヂレンマ

十二月の幻想　三四七
聞こえぬ悲鳴　三四九
大島行葵丸にて　三五一
春の消息　三五三
雨の降るのに　三五六
落　日　三五八
女給達　三五九
吾子よ吾子　三六一
夏の明方年長妓が歌つた　三六三
夏日靜閑　三六六
桑名の驛　三六八
龍　卷　三七〇
山上のひととき　三七三
四行詩　三七四
詩人は辛い　三七五
(秋が來た)　三七七
曇つた秋　三七九
倦　怠(へとへとの、わたしの肉體よ)　三八七
夜半の嵐　三八九
雲　三九一
砂　漠　三九三
漂々と口笛吹いて　三九六
材　木　三九九
童　女　四〇一
深　更　四〇三
白　紙　四〇五
一夜分の歴史　四〇七
夢　四〇九
少女と雨　四一一
梅雨と弟　四一三
秋を呼ぶ雨　四一五
はるかぜ　四一三
酒場にて　四二四
現代と詩人　四二六
暗い公園　四三〇

断片　四三一
夏の夜の博覧會はかなしからずや　四三七
道修山夜曲　四四一
（「千葉寺雑記」より）（短歌）　四四三
泣くな心　四四五
雨が降るぞえ　四五一
ひからびた心　四五四
雨の朝　四五七
子守唄よ　四五九
こぞの雪今いづこ　四六一

初夏の夜に　四六五
夏と悲運　四六七
溪流　四七〇
夏（僕は、卓子の上に）　四七三
（昔てはラムプを、とぼしてゐたものなんです）　四七四
秋の夜に、湯に浸り　四七七
四行詩　四七九

解説　四八〇
編註　五〇三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

未刊詩篇

〔一九二八年—一九二九年〕

女よ

女よ、美しいものよ、私の許(もと)にやつておいでよ。
笑ひでもせよ、嘆きでも、愛らしいものよ。
妙に大人ぶるかと思ふと、すぐまた子供になつてしまふ
女よ、そのくだらない可愛いい夢のままに、
私の許にやつておいで。嘆きでも、笑ひでもせよ。

どんなに私がおまへを愛すか、
それはおまへにわかりはしない。けれどもだ、
さあ、やつておいでよ、奇麗な無知よ、

おまへにわからぬ私の悲愁は、
おまへを愛すに、かへつてすばらしいこまやかさとはなるのです。

さて、そのこまやかさが何處からくるともしらないおまへは、
欣(よろこ)び甘え、しばらくは、仔猫のやうにも戯(じゃ)れるのだが、
やがてもそれに飽いてしまふと、そのこまやかさのゆゑに
却(かへつ)ておまへは憎みだしたり疑ひ出したり、つひに私に叛(そむ)くやうにさへもなるのだ、
おゝ、忘恩なものよ、可愛いいものよ！　おゝ、可愛いいものよ、忘恩なものよ！

（一九二八・一二・一八）

幼年囚の歌

1

こんなに酷(ひど)く後悔する自分を、
それでも人は、苛(いな)めなければならないのか？
でもそれは、苛めるわけではないのか？
さうせざるを得ないといふのか？

人よ、君達は私の弱さを知らなさすぎる。
夜も眠れずに、自らを嘆くこの男を、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo